

AI 時代の英語ライティング教育 — 生成から省察へ —

小田 登志子
東京経済大学

English Writing Education in the AI Era:
A Shift from Generation to Reflection

Toshiko Oda
Center for General Education, Tokyo Keizai University

要旨：生成 AI の急速な発展により、大学英語ライティング教育は大きな転換点を迎えている。学生はすでに辞書や参考書と同様に AI を活用しており、AI 利用を前提とした教育設計が求められている。本稿では、2025 年に実施した学生調査の結果を踏まえ、英語ライティングにおける AI 利用の課題と可能性を検討する。特に問題となるのは、学習者が AI の生成した英文の意味を十分に理解しないまま提出してしまう可能性である。この課題に対して筆者は「生成後の省察プロセス」を中核とした実践を提案する。具体的には、AI で整えた英文を音読・説明するスピーキング活動を行うことで、学習者が英語表現を自らの言語として理解・運用できているかを確認する方法である。本稿は、AI を排除するのではなく、学習者が責任を持って英語を使用するための支援の必要性を指摘し、AI 時代にふさわしいライティング教育の方向性を模索する。

キーワード：英語ライティング、生成 AI、省察

1. はじめに

本稿の目的は、生成 AI の普及に対応するために、外国語ライティング教育においてライティングを行った「後」のプロセスに注目した活動を提案することである。これはもちろんライティングそのもののプロセスを軽視してよいという意味ではない。本稿で主張したいのは、生成 AI の普及により外国語によるライティングの生成が容易になったため、文章を生成した後の検証の役割が以前よりも大きくなったという点である。このようなライティングの内容の検証は、学生が自分自身の考えを見つめ直す内省を行い考えを深めるプロセスであることが重要であると考え、これを「省察」という言葉を用いて表現したい。

外国語によるライティングの省察を教育現場で具現化する方法については，これから模索を続けなければならないだろう．本稿ではその一例として，スピーキングを利用した活動を提案する．具体的には，ライティングの音読，ライティングの内容に関する質疑応答を活動に組み込むことを提案する．

本稿の構成は以下の通りである．第2章では研究背景として，2025年に発表されたAIと外国語教育に関する書籍を紹介する．さらに，外国語のライティングでAIを使用することの問題点を議論する．さらに，2025年時点での大学生のAIに対する認識を調査したアンケート結果を提示する．第3章ではAIを利用して外国語のライティングを行った後の「省察」を組み込んだ活動の事例を紹介する．第4章ではまとめと今後の課題について言及する．

なお，本稿ではニューラル機械翻訳や生成AIのように大規模言語モデルに基づいたテクノロジーを「AI」と呼び，特に限定して言及する場合に「機械翻訳」「生成AI」と表記する．

2. 研究背景

2.1 AIと外国語教育をめぐる動向

AIと外国語教育をめぐる議論は急速に広がりを見せており，AIをどのように教育に取り込むべきかが活発に議論されるようになった．2025年で注目すべき動向は，日本国内において大学教員による関連書籍が出版され始めたことである．

代表的な2冊について簡単に紹介する．研究者向けの書籍である李・青山（2025）では，AIを活用した外国語教育研究の事例が示されている．現場の教員向けの実践書としては，大木・小田・岩根（2025）がある．この中では，外国語教員が抱くAI利用に対する心理的・技術的ハードルを下げ，授業に無理なく導入できるAIを利用した教室活動の具体例が数多く紹介されている．

2.2 AIを用いた外国語ライティングの何が問題なのか

AIの出現により，外国語教育の在り方が問われているという指摘をしばしば耳にする．最も大きい問題提起としては，外国語教育が果たして必要かどうかという点が挙げられるが，本稿ではとりあえず今後も外国語教育が必要であるという立場に立って議論する．そして，ライティングに焦点を絞って考える．

学習者が外国語のライティングでAIを用いた場合に起こりうる問題として（1）が挙げられる．ここでは外国語教育に特有の点に焦点を絞り，著作権侵害やハルシネーションといったAI利用全般に共通する課題については議論を他に譲りたい．

（1）学習者が外国語のライティングでAIを用いた場合に起こりうる問題

- a. 学生が自力で書いていない内容が含まれうるため評価しにくい・できない
- b. 学生が外国語を自分で考えなくなる恐れがある

c. 提出したライティングの内容を学習者自身が理解できていない場合がある

どれも問題であるものの、筆者は(1) a-bに関してはそれほど大きな心配をしていない。成績は持ち込み不可のテストに基づき評価することが可能であるし、スピーキングなど即時性が求められる活動があるかぎり、学生が外国語を自分で考えなくなるという可能性は低いと感じる。長文のライティングではこの指摘が当てはまると思うが、大学生のほとんどを占める非英語専攻の学生が長文の外国語を自力で書く必要がどれほどあるかは疑問である。

筆者がもっとも懸念するのは(2) c「提出したライティングの内容を学習者自身が理解できていない場合がある」である。外国語教育の現場に携わる者であれば、学生がプレゼンテーションの場でAIが出した自分が理解できない外国語を長々と読み上げ、聞いている側も何も理解できないという場面に遭遇したことがあるのではないだろうか。これは明らかに問題である。外国語使用者は学生であっても自分が使用する外国語に責任を持たなくてはならない。誤った外国語や失礼な外国語を使用して「AIが言ったから」という言い訳をすると、信頼関係にひびが入ってしまうため、すべての習熟度・すべての専攻の大学生が気を付けるべき問題であろう。

この問題を考える際に指針となるのが上記で紹介した李・青山(2025)に掲載されている水本(2025)である。水本はAIの活用に関して英語ライティングにおける効果が高いという先行研究を紹介している。ただし「見たら理解できる英語(Receptive Competence)がAIによる能力拡張(Augmented Competence)が可能な範囲」とであると明確に述べている。つまり、外国語ライティングにおけるAI使用を認めるものの、見ても理解できない英語・自分で内容を確認できない英語については、学習者は使うべきではないという考えである。

2.3 学生のAIに対する認識

教育は教える側と教わる側の共同作業であるという点は異論のないところであろう。したがって、外国語のライティングにおける生成AIの利用について学生自身がどう考えているのかを把握することは重要である。2025年に実施したアンケート調査からは、大学生が外国語のライティングにAIを利用することに対してかなり前向きなことが判明した。

表1は「外国語の作文をどのように課しどのように評価すべきかについて、現在までに挙げられている教員側の主な対応策のうち、採用してもよいと思う選択肢を選んでください」と問い、無記名方式で大学生が回答した結果である。アンケートは2025年7月に実施し、回答したのは都内の大学の文学部に所属する22名の学生である。この大学はすぐれた外国語教育で知られており、学生は外国語学習に関心が高い。このような学生は外国語の学習に愛着があり、生成AIを用いて作成した外国語の作文をそのまま提出することには抵抗があるのではないかと思いきや、結果は筆者の予想とはかなり異なるものだった。

表1：外国語の作文の課題を行う方法として採用してよいと思うもの（複数回答可）

選択肢	人数	%
1 自宅ではなく教室で試験形式で作文を行い，その提出物を評価する。	8	36.4%
2 作文の内容をあらかじめ告知して学生に自由に準備をさせ，教室で試験方式で作文を行い，提出物を評価する。	7	31.8%
3 自宅で行う課題として作文を課し，生成 AI の利用を禁じ，提出物を Turnitin でチェックしたのち評価する。	4	18.2%
4 自宅で行う課題として作文を課し，生成 AI を使用した場合はどのように利用したかを申告させて，提出物を評価する。	6	27.3%
5 自宅で行う課題として作文を課し，自力で書いた作文の校正に限って生成 AI の使用を認め，提出物を評価する。	5	22.7%
6 自宅で行う課題として作文を課すが，Google ドキュメントのようにライティングの過程が記録されるツールを用いることを条件とし，提出物を評価する。	6	27.3%
7 自宅で行う課題として作文を課し，その音読の録音を評価の対象とする。	5	22.7%
8 自宅で行う課題として作文を課す。生成 AI を用いるスキルも本人の外国語運用能力の一部と考えて利用を許可し，提出物を評価する。	7	31.8%
9 選びたい選択肢がない。	0	0%

n=22

複数回答可で選んでもらった項目のうち，30 パーセント以上の学生が選んだ選択肢が三つあり，正反対の内容の選択肢が含まれていることが興味深い。一つ目は「1. 自宅ではなく教室で試験形式で作文を行い，その提出物を評価する」，二つ目は「2. 作文の内容をあらかじめ告知して学生に自由に準備をさせ，教室で試験方式で作文を行い，提出物を評価する」である。どちらも試験の公平性を確保できる方法である。驚くべきは三つ目の「8. 自宅で行う課題として作文を課す。生成 AI を用いるスキルも本人の外国語運用能力の一部と考えて利用を許可し，提出物を評価する」である。つまり生成 AI の出力を提出物とすることが可能である。この方法を支持した学生の何人かに理由を述べてもらったところ「教員は生成 AI 利用を前提にして評価すればよい」「今後は生成 AI を使用するスキルが重視されるから」と答えた。ただし 8 の選択肢は回答した学生の間でも意見が分かれ，「これは IT スキルなので外国語の授業にはふさわしくない」という意見もあった。

このように学生の意見は一様ではないものの，評価の問題をはらむ大学のライティング課題を行う際であっても，いずれかの段階で AI を使用したいという意向がうかがえた。仮に，英語習熟度が低い学生を調査した場合，AI を使用したい傾向が強くなると予想される。このような学生の動向を考えると，水本（2025）が提唱したように，AI を利用させつつ，自分が理解できる範囲の英語を使用させるという方法が活路として見えてくる。

3. 省察を促す活動の具体例

3.1 ライティング生成後の省察

自分が理解できる範囲の英語を使用させるという考えには多くの教員が賛同するであろう。しかしそれをどのように具現化するかについては未だ明らかではない。そこで筆者は、使用する英語を本当に理解しているかどうかを学生自身が省察する機会を設けるために、スピーキング活動を取り入れることを提案する。

まずはライティング提出時にテキストと音読の録音を併せて提出させた。また教室内でライティングの内容に対する質疑応答を行った。つまり、提出した英語を流暢に読み、質問に英語である程度答えられることを「理解している」ことの表れと考えた。

これらの方法が本当に「理解している」ことの証明になるかどうかは、今後の英語教育研究に委ねたい。しかし現実社会においては、自分が書いた文書をきちんと読める・説明できることは重要である。そうでなければ自分の文章であることを納得してもらうのは難しいのではないだろうか。

3.2 スピーキングによる省察を取り入れたライティング活動

2024年5月から2025年7月にかけて、都内の文系大学生約10名を対象にしてスピーキングによる省察を取り入れたライティング活動を授業の一環として行った。一連の流れはおおよそ以下のようなものである。

(2) スピーキングによる省察を取り入れたライティング活動の流れ

- a. 学生はライティング課題を自宅で行い、AIを任意で使用する
- b. ライティングとその音読を提出する
- c. 授業で音読ができるかどうか学生同士で確認する
- d. ライティングの内容に関する質問に答える
- e. 学期末のテストで同じライティング課題を行う

各段階について補足する。(2) a: AIを任意で使ったライティングは、各学生が自分専用のテキストを準備したと考え、採点の対象とする必要はない。(2) b: 学生はライティングを提出する際にその音読も併せて提出する。この際、ワンテイクでミスのない録音を提出することを条件とすると、学生が長文を提出せず、かつ何度も練習するため、英文理解の促進を図ることができる。そして、流暢に読めていなかったり構文を理解していなかったりする録音を発見した場合は、英語を修正あるいは削除するよう教員が助言する。(2) c: 音読は一見単純な活動のようだが、机間巡視をすると3人称単数の-sなどが定着せず読んでいないことが多い。(3) d: 教員との質疑応答はクラスの規模がある程度少人数であることが条件であろう。人数が多い場合は、スマホの生成AIアプリに対して音読し、内容に関する質問をするように生成AIに依頼することができる。教師との質疑応答の順番を待つ間に学生同士で取り組ませることもできる。筆者が試した限りでは、生成AIの

質問と教員（筆者）の質問内容は似ていることが多かった。（2）d：期末のテストで同じライティング課題を行うと，定着度を確認することができる。

4. おわりに

AI時代の英語ライティング教育において重要なのは，AIを排除することではなく，AIを利用しながらも学習者が自らの言語使用に責任を持てるよう支援することである。AIを用いて得た英語を「理解できる範囲」に調整し，学習者が正しく音読できると同時に内容を説明できることが不可欠である。省察的なライティング教育は，AI利用と学習者の成長を両立させる方策の一つである。

本稿の限界と今後の課題について述べる。本稿で紹介された活動は試行的なものであり，小規模でインフォーマルな手法を用いたものに留まった。今後，規模を拡大した検証が必要である。また，生成AIによる質問が教員による質問の代替となりうるか調査することを次の研究課題としたい。そして，読めること・質問に答えられることがその英語（外国語）を理解しているという前提は第二言語習得の専門家によって検証されなければならない。

謝辞

本稿の内容は，2025年11月19日に行われた青山学院大学外国語ラボラトリー・アカデミックライティングセンター共催「今，ライティング教育をめぐって知っておきたいこと」（オンライン開催）で行った発表を基に執筆したものである。本研究はJSPS科研費JP23K00780（代表 瀧村裕子）の支援を受けた。発表にご参加いただいた聴衆の皆様，ならびにアンケートにご協力いただいた学生みなさんにお礼を申し上げたい。

参考文献

- 大木充，小田登志子，岩根久（編著）．（2025）．『AIを外国語学習に使わない手はもうない』．ひつじ書房．
- 水本篤．（2025）．「AIとライティング教育：英語ライティング教育における生成AIの活用と課題」．李在鎬，青山玲二郎（編著）『AIで言語教育は終わるのか？：深まる外国語の教え方と学び方』（pp. 136–153）所収．くろしお出版．
- 李在鎬，青山玲二郎（編著）．（2025）．『AIで外国語教育は終わるのか？：深まる外国語の教え方と学び方』．くろしお出版．